

博士論文

平成26（2014）年度

国境社会の変容と国境に生きる人々の日常実践
——中国・ベトナム国境からの考察

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科

韓 娜

1 本研究の目的

本論文は、中国・ベトナム国境の変容及び再編の過程において国境に生きる人々に関する民俗学的研究である。

これまで、国境研究においては国家に関連する主権、外交、安全保障などのテーマに目を向ける傾向があり、国境そのものが分析単位として論じることは多くない。その原因は国境が国家・社会・経済の周縁といった位置づけで言及される対象であったことにあるだろう (Van Shendel, 2005b:8)。しかし、急激なグローバル化と市場経済化の進展により、国家による人・モノ・カネ・情報のコントロールが難しくなり、国境を越えた移動が活発化した結果、「もはや国境が機能しなくなり、少なくとも国境の持つ本来の機能が一部分しか果たせなくなった」(Donnan・Wilson, 1999:3)。また、近年、世界各地で頻発している民族紛争の多くは、近代国民国家の枠組みに依拠した政治的境界に対する懐疑がその主因となっている。国民国家の枠組みが問われる時代になっている。従来の国民国家を前提とした地政学的認識や歴史理解、民族集団の社会文化研究のあり方に再検討を迫られ、国境地域は重要な研究対象として関心が集まっている。

筆者にとって本研究の直接的契機になったのはある新聞記事であった。1991年11月9日付、『河口から麻栗坡にかけて——中越国境貿易見聞』というタイトルの記事である。河口は、のちに本研究の調査地となったベトナムに接する中国雲南省の国境町である。記事には、「1989年からたくさんのベトナム人が河口にやってきた。買い物や商品取引などをしていた」(『人民日報』、1991年11月19日付)と記載されている。しかし、中国・ベトナム国境は、1979年の国境紛争のため、10年間あまりにわたって国境が閉鎖され、国境再開ができたのは、1991年11月に両国の国交正常化後だとされている。そうだとすると、1989年当時、国境紛争を経験した両国の関係がまだ形式的に回復していないにもかかわらず、国境を挟んでの緊張状態や武力衝突とは対照的に、人々は行き来していた。このような現象の背景には、国家権力が衰退していることにあるかということ、必ずしもそうとは言えない。実際、国境紛争後の中国・ベトナム国境は以前より規制が厳しく、多くの警備隊が設置されていた。住民にはそういう規制や警備隊の存在が分らないのか、それとも分っていないが無視しているのか。

国境において、国家領土の間に引かれた「一線」を越境する人々と、それを統制しようとする国家権力との「せめぎ合い」は実にダイナミックなものである。国家の境界、つまり国境がいかに形成されたか。その上で実際に国家の周縁部分に包摂された社会が、国境線画定以降の政治過程をどのように経験してきたか。そして、地元住民は、国境に遭遇する際、どのような認識を持っているか、どのような対応をしているか。これらの問題は、従来の国民国家的枠組みでは到底解明できない。国境研究に対する新たなアプローチが要求される。

本論文は、中国・ベトナム国境地域で実施した現地調査で得られた資料及び文献調査に基づき、国境の変容及び再編の過程において、国境に生活を営む地域の人々の日常的越境実践を考察する。地域の人々が、国境に根ざした生態・社会・文化を、国家の政治、経済、外交の動向に接合せつつ、国境の生活空間を構築・維持する動態を克明に記述する。国境地域で展開する越境の諸相を描き出し、国境を越えて広がる生活圏のトランスナショナルな属性が「国民国家」の文脈を相対化する視点を提供する。

2 本研究の対象——中国・ベトナム国境地域

中国・ベトナム国境は、中国側の広西壮族自治区と雲南省が、ベトナム側北部地域のクアンニン省 (Quang Ninh)、ランソン省 (Lang Son)、カオバン省 (Cao Bang)、ハザン省 (Ha Giang)、ラオカイ省 (Lao Cai)、ライチャウ省 (Lai Chau)、ディエンビエン省 (Dien Bien) 7省に接している。陸地境界線の全長は1350キロである。

中国・ベトナム国境地域は、国境の考察において際立った特徴を持っている。すなわち、前近代ボーダーレスな性格を持った国家周縁の国境地域が、植民地化及び独立後の国民国家によって分断され、それぞれの国家空間に編成され、さらにグローバル化や地域統合の動きによって再接合されてきたということである。

中国とベトナムとの間に、もともと近代的な領土概念に基づく排他的な国境線が存在しなかった。現在の中国・ベトナム国境は、19世紀に中国（当時清朝）とフランスの権力闘争を反映した植民地主義の遺産なのである。ベトナムは東南アジアで唯一の「中華文明圏」に属する国であり、紀元前2世紀から約1000年にわたり、中華帝国の領土の一部としてその支配下にあった。また939年中華帝国から自立を達成させた後も、ベトナムは、宋元明清など中国の歴代王朝と従属関係を持ち、宗主国と藩属国の関係を維持してきた。ベトナムは古来より中国との密接な関わりのなかで文化、思想を育んできた。以前の中国とベトナムの間には、中華帝国の華夷秩序の下で明確な国境が存在せず、中華文化システムの最周縁部として、力の重なり浸透しあう曖昧な空間であった。

また、中国と東南アジア大陸部の間には国境と民族との交錯が複雑な様相を呈している場所の一つだといえる。様々な民族社会集団の生活圏が多様な重なりを持ちながら存在し、国境に分かれて居住する同系の民族が、すなわち境界民族は少なくない。国境画定以前から、現在の国境線を跨いだ生活圏や文化圏を構築していた。そのため、同じ文化、歴史を持つ中国・ベトナム国境地域住民は、国境を越えたひとつの生活圏を共有していることは理解に難くない。国境両側の住民が国境を行き来し、物の交換など伝統的な零細交易を行っていた。これらの伝統的な生活圏において物の交換は、利益を得るというより、必要不可欠な生活の一場面である。

密接な接触を保ってきた中国とベトナムの間に、厳密な境界線を定めることは、不可能なことである。中国・ベトナム国境が最初に画定されたのは19世紀末のことである。19世紀半ば以降フランス植民地主義の進出によって、ベトナムはフランスの植民地となり、中国（当時清朝）とフランス政府は国境の画定に関して合意に至った。現地検証されないまま、両者の間に「一本線」の国境が恣意的に引かれた。こうした地政学上の国境が人々の生活空間としてのつながりを無視して横断していることは決して珍しくない。

第二次世界大戦後、1945年ホー・チミンの指導したベトナム共産党は「八月革命」を起こし、ベトナム民主共和国を設立したものの、1946年から9年間の対フランス戦争、1965年から10年間の対米戦争は継続することになる。一方中国では、1949年中華人民共和国が成立した。独立国家を果たした中国とベトナムは、同じ社会主義国家であるため、またベトナム戦争において中国がベトナムを援助し続けてきたため、両者が緊密した関係を保ってきた。国境画定に関してはほとんど触れなく、国境管理も厳密とはいえなかった。

しかし、1975年サイゴン陥落によって南北ベトナムが統一され、ベトナム戦争が終結すると、ベトナムと中国の関係は悪化し始めた。ベトナム政府による華僑弾圧、カンボジアをめぐる両国の対立が原因で、中越の緊張関係は一気に頂点に達した。そして1979年中越戦争が勃発した。この戦争により、国境が一時封鎖され、以降10年にわたって両国関係は断絶することになった。一方、従来に存在した国境を越えた共生は、戦争があっても維持されている。国家間の対立と対照的に、民間の交流が一時停止したが、住民たちが国境を行き来し、自主的に交易を回復し、物の交換するための市場まで形成したことがある。

冷戦終結と同時に、1991年中越関係が正常化された。両国が相次いで対外開放、市場経済化という政策へ転換したため、中国・ベトナム国境地域においては「国境開放」をめぐる協力策が打ち出され、これまで閉ざされていた中国・ベトナム国境が開放に向かった。経済交流が再開され、国境を越える人やモノの越境移動が非常に活発になり、「戦場」から「市場」へと変貌を遂げた。国境が、中国とベトナムに限らず、中国と東南アジアを結びつける大動脈ができてきた。

以上の中国・ベトナム国境の変遷を見ると、19世紀以来、植民地化及び独立後の国家による領域的境界線引き、さらに20世紀に入って国境をめぐる軍事衝突、冷戦後の地域経済統合によって、ベトナムと

中国との国境において地域間の様相が大きな変化が生じている。つまり、国境を跨いだ生活圏を社会的基盤としてきたこの地域が、国家によって包摂され、国境によって分断され、さらに再接合された。

このような国境の変遷は、ベトナムと中国との国境に限らず、東南アジア大陸部、さらに世界の多くの国境地域においても同様である。こうしたマクロな地域的文脈や社会状況の変化は、国境社会に対する新たなアプローチが必要であることを示している。

3 先行研究と本研究の枠組み

本節においては、先行研究における本研究の位置づけを確認し、本研究の課題を明らかにする。以下の二つの研究領域、すなわち国境論としての本研究の位置づけと、中国ベトナム国境地域研究における本研究の位置づけを述べ、本研究の分析の枠組みを提示しておきたい。

3-1 国境研究における本研究の位置づけ

国境研究をめぐる従来のアプローチには、大きく分けて二つの境界、つまり政治的境界アプローチと民族的境界アプローチがある。前者の政治的境界は、国家がその主な研究対象となり、国家側の視点から国境における国家権力や支配がよく問題視される。一方、後者の民族的境界においては、国境における特定の社会や集団を主な研究対象としてきた人類学研究が多い。本項では、この二つのアプローチによる研究について整理しておきたい。

(1) 国境と国家（政治的境界のアプローチ）

一般的概念には、国境は、近代国家成立の前提とされてきた。その基礎とする理論は、社会学者マックス・ヴェーバーの国家論である。「国家とは、一定の領域の内部で正当な物理強制力行使の独占を実効的に主張する人間共同体である。ここで注目しなければならないのは『領域』は国家の特徴の一つであることである」(ヴェーバー、1980:9) ヴェーバーは国家の定義において、国家の「領域性」を強調した。のちに続く国家論の系譜においても、領域は国家の定義に組み込まれてきたとあってよい。また、国境を解釈する際にも、基本的にこの国家論を基盤としている。(石川、2008:5)

こうした国家成立の前提とされた国境の有無が、国家形態における前近代と近代を分ける一つの明確な指標にもなっている(綾部、1998:173)。ギデンスは、次のように述べている。「伝統的国家の領土権と国民国家を識別するうえで、伝統的国家の『辺境』(frontier)が、国民国家の間に存在する『境界』(boundaries)と著しく異なることの理解は必要不可欠である」(ギデンス、1999:64-65)。アンダーソンも類似した議論を行っている。「近代的概念にあつては、国家主権は法的に区分された領土内の各平方メートルに、くまなく、平たく、均等に作用する。しかし、国家が中心によって定義された前近代にあつては、境界はすけすけで不明瞭であり、主権は周辺にいくほどあせていって境界領域では相互に浸透しあっていた」(アンダーソン、1997:44)。こうした近代的な意味での「国境」は、伝統的国家の不明瞭な「辺境」が明確な一本線的な存在に推移してきたとされる。このような主権と明確な境界線という近代国家モデルは、ヨーロッパの植民地主義によって、地球規模に及んだ。東南アジアという文脈において眺めれば、前近代国家に関する多くの事例研究が立証している。「マンダラ (Wolters 1982)」、「銀河系政体 (Tambiah 1976)」が代表的なものである¹。いずれも、前近代国家の間に明確な境界線がなく、各権力の中心の波紋が果てるところが境界領域であると指摘している。国境形成において、トンチャイ (2003) の近代タイ形成における地図化プロセスが代表的な事例研究として挙げられている。

近年、グローバル化の進展の下、国境における急激な変容が注目されている。ヒト、モノ、金、情報

¹ 「マンダラ」とは、強い支配力を持った大中心が周りの多数の弱い中心に影響を与えながら存在する政体構造である。それに対して、「銀河系政体」は中心の惑星が様々な衛星に囲まれており、その衛星は多少なりとも自立的な政体であり、中心の影響力の圏内にあると論じている。

の空間的越境化が拡大し加速すると同時に、国家という単位を越える規模の社会関係が急速に広がり、国境の意味や国家の概念が改めて問われることになった。一方、Brenner (1999) はグローバル化を脱領域化と再領域化が同時進行する過程として捉え、つまり、グローバル化によって領域に根ざした社会的空間が創出、編成、再編成されていると指摘している。(Brenner, 1999 : 60-62)

従って、国境の形成・発展について、次のような説があるとされている。すなわち、「前近代」「近代」「ポストモダン」の三段階に基づき、それぞれ「辺境の接合」から「境界の分断」、「境界の分断」から「境界の溶解・再接合 (ボーダレス)」といった国境の境界性の通説である。(Walker, 2008:101-102) しかし、この通説の問題は、いずれも、国境の存在を肯定するか否定するか、国境への支配を強化するか衰退するかの二元分法になりがちで、ゼロサム・ゲーム的な把握に陥り、結果として静的な構成論にとどまることである。というのも、前近代国家の「辺境」の不明瞭さは、近代国家の成立に伴う「国境」の明確さを大前提に論じてしまう問題点をはらんでいたのである。あくまでも「国民国家」を出発点とする議論に過ぎなかった。一種の領域主義的な認識論ではなかろうか。つまり、社会・経済・文化すべてが国家を機軸とした世界形態の認識になっているのである。これらの議論だけでは、国境の状況を理解することは難しく、国境の管理にも十分に発揮できない。

(2) 国境と社会 (民族的境界のアプローチ)

国家、国家を構成している国民、そして地理的領域と一体化したものかという問題への注目である。今日の世界でもっと基本的な単位とされている「国民国家」において、一国民 (ネイション) と一国家 (ステート) との融合は完全なものではない。その典型として挙げられるアジア・アフリカの国家である。これらの国家は、ほとんど植民地主義国家のルールに基づき引かれた国境であり、「現地の人間は言語的、宗教的あるいは民族的な差異の有無に関わらず、偶然にそうした境界線の内部に集合させられたに過ぎない」(梅垣, 1999:141)。一国家＝一国民という体裁への問題提起として、20 世紀後半から展開された国境研究を見ると、地理学、政治学次元の論考から、国境という分ける線の意味に迫ろうとする研究へと推移し、国境と社会の問題が新たな視点から展開され、多くの研究成果を出している。

1980 年代以降、アンダーソンやゲルナーに代表される近代主義者の議論が多く展開されてきた。民族や国民を含む共同体が近代になって形成されたもの、あくまでも近代の発明品と見なしている。アンダーソン (1997) の「想像の共同体」によれば、近代国家は私たちの頭の中の想像にすぎない。近代国家の領域についても、想像なしには存在しないと主張しており、近代国家の地図に領域的輪郭をもつ想像の現実性を付与した重要な道具だと説明している。ゲルナー (2000) は、政治的な単位と民族的な単位が一致しなくてはならないといった均一化された国家空間を作り出す装置としてナショナリズムを捉えている。

それ以降の研究は、国民国家との関わりから民族社会集団を語ることに関心が集まった。特に、国家の国民へ編入していく過程に注目し、エスニック・アイデンティティ (民族的帰属) など国境と社会の問題が新たな視点から展開され、多くの研究が蓄積されてきた。東南アジア大陸の国境地域において、国境を越えて居住する少数民族が、いかに国家による恣意的な包摂と排除を経験してきたのかについての研究がかなり行われている。たとえば、Rajah (1990) はビルマ・タイ国境のカレン族を考察し、綾部 (1998) はタイ北部のリス族の調査を行い、そして西本 (2004) はタイ北部のラフ山地民を対象として調査を行っている。いずれも国家へ包摂過程を国境線への囲い込み、かれらの国境認識の変化という観点から分析されてきたのである。

以上に見てきたように、国民国家との関わりから国境社会を再考した研究成果は数多く存在する。本研究はいうまでもなくこうした先行研究から大きな示唆を得られた。しかし、これらの研究に共通する問題点は、国家という単位を基礎に分析したものであり、結局国家中心主義的な認識論から免れておらず、社会文化的な要因、つまり社会が国家に与える影響を無視してしまうことにある。一種の方法論的領域主義に陥っている。すなわち、国家が一方向的に社会に影響を及ぼすと考えたとしても、国家にとっての社会は国境線に囲まれた国内社会集団に限定される。国家は社会を分断しているという前提に立つ

研究では、国境と社会の関係を把握することができないだろう。

3-2 中越国境研究における本研究の位置づけ

中国・ベトナム国境地域は幾重もの意味で地政学的・学問的な周縁にあたり、国境そのものが議論の中心を占めることは少なく、本格的な民族誌的研究は極めて乏しい。

まず、国境形成について、極めて政治性の高いものであるから、両国間の国境の経緯やそのものの画定過程が主要な研究課題として行われてきた研究が多い。伝統中国王朝とベトナムの間の辺境について、尤（1987）、劉（1988）、孫（2001）の研究が挙げられるが、清仏戦争後の国境の交渉や画定について、木（1991）、龍（1992）が挙げられる²。また、これらの研究は、いずれも中国・ベトナム国境を雲南省側と広西省側の二つに分けて論じている。しかも、歴史事件の整理や、概説的な資料が多く、独自の視点からの分析がなされてこなかった。大局的把握には適しているものの、現実として国境が現地社会によってどのように生きられているかという検討が不十分である。

次に、90年代以降の中越国境を対象とする研究蓄積が多い。国交正常化や国境再開そのもの実施過程が主要な研究課題とされ、経済開発など政治的・経済的な側面が強調されがちである。さらに、国境貿易を中心とした研究がたくさん行われ、国境再開が現地社会にもたらした変化をこうした経済指標にあてて分析することが多い。（Womack1994、Roper2000、杜2000、池部2010）³

このように、先行研究においては、国家間の動向について扱うものが多く、国境のローカルレベルのものが少ない。全くないわけではない。注目に値する研究動向は以下のようなものがある。一つは、国境と少数民族との関係の考察である。特定の境界民族、いわば国境に跨って居住する民族を取り上げ、国境における人の移動と交流の実態についての研究である。例えば、塚田（2010）は広西の壮族とベトナムへ移住したヌン族との社会文化の異同、相互の交流の実態、さらに相互のイメージについて研究を行っている。鄭・楊（2009）は雲南の苗族村を対象とし、中国・ベトナム国境変遷に伴う村人の国境を越えた通婚の変容について論じている。もう一つは、少数民族のエスニシティを扱う研究である。伊藤（2003）は、中国・ベトナム国境地域のタイ族・ヌン族を対象に、国家による国民化の側面を強調し、清末・民国期の比較的自由的な「民族の世界」がドイモイ以降、国家の存在に制約されるように変化したことを指摘した。

しかし、国境という社会空間の形成の面においては、十分に検討されたとはいえない。具体的には、以下の問題点があると指摘したい。

第一に、国境社会を見なした研究が数多く存在するものの、その大半はある時期に限定される。

第二に、国家レベルの国境、中央の国境政策の動向や政策の実施過程などが多く論じられているのに対して、ローカルレベルの国境社会における政策実施の実態への説明は大きな進展が見られない。例えば、1979年以降の中国・ベトナム国境をしばしば「紛争・平和」「閉鎖・開放」と二分法で論じられる傾向がある。つまり、国境社会は危険な閉鎖された場から、平和な自由往来の場へと大きな変貌を遂げたということである。中越戦争の発生した1979年から、国交正常化の実現した1991年までの間、いわゆる1980年代に対する研究調査は殆ど皆無空白の状態である。そのため、1980年代は中国・ベトナム国境の閉鎖期と単純に片付けられてしまう。1980年代において対立・緊張したままの両国の国境政策や動向が如何なるものなのかについて、ほとんど触れられていないのが現状である。現代中国・ベトナム国境地域間の様相や中国・ベトナム関係をより正確に把握するには、1979年中越戦争はもちろん、1980年代における国境の動態も明らかにしなければならない。また、90年代中国・ベトナム国境再開に関し

² 尤（1987）は大量の歴史資料を用い、秦漢朝から清朝まで雲南省側の中越辺境の変遷史をまとめた。劉（1988）と孫（2001）は広西省側の中越国境を対象とし、清朝の辺境管理を論じている。清仏戦争後における国境交渉問題をめぐって、木（1991）は雲南省側の中越国境を、龍（1992）は広西省側の中越国境を論じている。

³ Womack（1994）、Roper（2000）は国交正常化に伴う中越間の国境貿易の変化、経済協力関係を述べている。杜（2000）は90年代以降の中越国境貿易を論じており、両国貿易政策の相違なども触れている。池部（2010）は近年中越関係緊密化を背景に国境貿易やそれに伴う国境経済圏の発展を論じている。

ては、先行研究は国境貿易の促進が国境社会の発展に重要な役割があることなど指摘したものの、国境貿易の政策が国境社会でどのように受容されているのか、国境社会が国境貿易にどのように関わっているのかといった国境貿易の実態分析はいまだ不十分である。さらに、急速な発展を遂げた国境貿易については、国境住民が社会現実にとどこまで溶け込んでいるのか、どのような影響を受けているのかは十分の調査がされていない。

第三に、国境地域、国境に暮らす人々は、国家権力の支配の「受身」と見なし、あくまでも受身的・従属的な存在として描かれがちであり、その結果として、「国家権力の浸透」を「上から下」の過程と捉えてきたものが数多く存在する一方、国境社会の特質がどのように国の国境政策や支配のあり方にも一定の影響を与えていたのかについてはあまり論じられていなかった。

第四に、いうまでもなく、研究者にとって当たり前の理念的な国境があると同時に、国境に暮らす生活者が日々の営みの中で語る実践的な国境も存在するはずである。それにもかかわらず、後者はほとんど等閑視されてきたと言ってよかろう。人々の認識の問題、国境変容への対応の問題が含まれていることに注目し、中央政権から見た場合の国境という位置づけとは別の角度から、国境住民から見た場合の生活の場とした国境を解釈し直す必要があると考える。

3-3 本研究のアプローチ

まず、本研究における国境の定義を明らかにしておきたい。Donnan と Wilson の定義を参考としたい。彼らは国境の三つの要素を挙げている。①複数の国を切り離すと同時に接合する法律的境界線。②境界線を画定し維持するために存在する国家機関。③変化する水平的な幅を持つ領域ゾーンにおいて人々が国家との関係をめぐって様々な行動を起こしながら交渉する。(Donnan・Wilson、1999:15)

つまり、国境は、「線」と「面」の二つの性格を同時に持つ。この「面」は、前近代国家において中央に対置される不明瞭なゾーン又は緩衝地帯としての辺境という意味ではない。また、国境のもつ「線」を否定するという意味でもない。ここで明確しておきたいのは、本研究で認識する国境は、一方で領土的境界線が維持されながらも、同時に「水平的な幅」が確保されるような社会空間である。また、この国境空間は、人々が国家と関わりながら様々な行動を起こし、時に国家限界を越え、国家権力を抵抗する実践の場でもあることを認識すべきである。

Gainsborough (2008) は、国家の権力行使は、ある意味で国境社会に及んでいないと述べ、様々なアイデアや実践が会おう場としての国境の側面に注目すべきと指摘している。すなわち、たとえ国家が形成した後も、いかなる国家の制度的制約や国家間の関係にも関わらず、国境は地域の人々にとって、平凡な日常生活を営む「ごく普通」の生活の場に過ぎず、国境を前提として生活していくことが、人々の生活の営みであり、日々の現実である。国境内外の政治経済状況が変わっても、日常生活における国境との共存を余儀なくされている。また、塚田 (2010) が指摘しているように、人々の日常の営為は国境を相対化する傾向がある (塚田、2010:11)。人々の自由な越境移動を、国境によって一元的に制限・管理してきた国家のパフォーマンスとは別で、越境が慣習化している人々は日常生活の維持のために国境に関係なく移動し続けている。

従って、国境が単なる政治的境界線ではなく、本研究では、国境を「政治空間」と「生活空間」との二重的性格をもつ空間と把握し、「国家権力の支配とそれに対抗するせめぎあいの場」とする。すると、国境地域の人びとが、国境や国家との関わり、国家の介入など、新たな状況の中でいかに柔軟に対応してきたかを注目すべきである。本論文は、こうした人々の主体性を軸に分析を行う。

本論文では、国境における変遷を、地元住民の実践と絡めて考察する。換言すれば、国境を越えて生活の営みを行い、様々な社会関係を形成・維持する国境の人々に注目したい。「生活空間」と「政治空間」により形成される国境を、変動と変容という側面から住民側の国境変遷史として描く。動態としての国境を、国家との関連、地元住民との関係で設定し、その国境を社会空間として提出する。「自己の生活空間」としての地域が、他の地域や国家と関係していることに着目する。人間にとっての「国境」とは何

かという規範的な疑問と、国境をめぐる国家の制度が形成する実践及び人々がその制度を捉え直していく過程を検討し、国境社会の変容と再編のダイナミズムを、人々のミクロな経験とその経験されたものを基礎づけているマクロな政治文化的環境の双方の二重の視点から明らかにすることが目的である。

4 研究の方法

本論文の目的は、中国・ベトナム国境社会の動態を明らかにすることにあるので、歴史文献とフィールドワークを併用する歴史民族学的な研究方法を用いる。

文献としては、特に歴史資料に依拠して行う。とりわけ、清は現在の中国・ベトナム国境社会を理解するための鍵となる一大変革期である。清朝歴代皇帝の事跡を記した実録『清実録』、同時期のベトナムのグエン(阮)朝歴代皇帝の実録『大南実録』などの史書を用いる。また、近年、中国学者による中越両国関係の史資料の編集が進められており、これらの資料も参照する。ほかに、中国・ベトナム国境における県・町の「地方志」を資料として利用し、国境の社会動態を一定程度知ることができる。

歴史文献のほか、フィールドワークを通じて得られた資料をも用いる。今世紀における国境の変遷とそれに対する国境住民の対応が実際はいかなるものであったかを知るために、現地調査が不可欠である。とりわけ、1970年代から1980年代にわたる国境問題のため、国境地域での現地調査は不可能な状況が続いており、資料も研究も極めて少なく、国境現地の住民の声を聞く必要がある。それらの資料には歴史文献の制約を補うような質の高い材料も少なくなかった。

フィールドワークは、中国雲南省河口——ベトナム・ラオカイ国境で行った。2005年の短期調査以来、2006年7月から2011年5月まで断続的に行っており、年に1回、通算滞在期間は6ヶ月間である。越境に関する参与観察、あるいは国境住民に直接にインタビュー調査を行った。現地住民の生の声を集めるインタビュー調査は、当事者が残した文字資料が少ない国境地域の実態を描くときにその限界を補うのに役に立つだけでなく、また、公的文書では触れられない国境の実態も把握することができると思われる。

このように歴史文献とフィールドワークによって得られた資料とを併用する研究方法が、国境社会の動態を分析するときに有効な方法となるものと思われる。

5 論文の構成

第2章では、19世紀の植民地時代に遡り、中国・ベトナム国境の「近代化」過程を検討した。清仏条約とその後の国境調査により、中国とベトナムの間の国境は、伝統的な「境域」から、近代的な「国境」への移行がこの時期に行われたのである。近代的な国境画定に伴って、人々の移動が制限され、国境管理の具体化も検討した。

第3章では、国家体制の変動期における中国—ベトナム国境について検討を行った。フランス植民地勢力からの独立運動に始まり、日本の侵略、抗仏戦争、抗米戦争と50年近くに及んだベトナム戦争の歴史における、中国・ベトナム国境地域がいかに政治的なフロンティアに変質させていったかを検討した。また、国境地域住民は戦争の過程で、命がけで国家のために戦うという経験を通じ、「ベトナム国家」の枠組みを身をもって体験する。人々は、歴史的に空間、時間、経験、価値を共有し、「ベトナム国民」としての内的結びつきが生まれた。さらに、中国政府の国家建設過程においては、国民化政策の一環として少数民族自治区の設立政策がとられた。合作社での共同作業などの社会主義的政策が国境地域でも遂行され、国家権力が国境地域に浸透し、人々に国境や国家の存在を意識させたのである。しかし、政府による国境の実効支配が進展したように見えるが、必ずしもそうと言い切れない。ベトナム戦争におい

て隣接する中国側の雲南省と広西省が後方支援の役割を果たしたので、ベトナム戦争における戦場は、ベトナムを北限とする国境線の中に集約できない。国境は商品流通の大動脈として機能し、国境管理においては厳密とは言えなかった。

第4章では、主に中越戦争といった政治事件についての考察から、国境に初めて強烈的な存在感を示される国境に暮らす人々の個人経験を具体的に描くことで、中国とベトナムという国家をどのように把握していったかを浮き彫りにした。国境の顕著化について人々の日常との関わりから検討した。相對峙する両国と対照的に、国境住民によって越境交易のための「草皮街」が形成された。従来に存在した国境を越えた共生は、軍事的衝突による領土の分断があっても維持されていることを明らかにした。重なり合う社会空間となり、分断と共生という二つの相異なる関係性の中で生きていく国境社会を描き出した。

第5章から第7章では、国交正常化後の中国・ベトナム国境における国境社会の動態を明らかにした。90年代以降中国・ベトナム国境における国境貿易ブーム、国境経済の構造を明らかにするだけでなく、国境開放をめぐる制度の変容を明らかにした。戦争時期住民の間に形成された「草皮街」が次第に合法化され、辺民互市に代わっていった。また、国境貿易の形態や優遇措置についても明文化されるようになった。

第6章は、個人の経験に注目し、人々が日常生活においてどのように再開された国境にかかわっているのかを、交易、出稼ぎ、親戚・友人訪問など日常的な越境者の諸相を分析した。実際、国境制度を利用する新たな国境貿易実践を生み出していることを明らかにした。

第7章では、国境にまたがる資源に依存し、生業を求める地元住民は、国交正常化に伴う中国・ベトナム国境地域の変容の中、どのように対応し、生活を維持しているのかについて調査分析し、「運び屋」を介したインフォーマル貿易に参加している人々の越境のあり方について検討を行った。運び屋の事例を通じて、国境、国家権力と常に向き合うことを強いられているが、一方で国家の枠組みに取り込まれるだけでなく、越境において個人が権力と交渉しながら共存を図る辺民像を描き出した。

6 結論—国境：政治空間と生活空間

中国・ベトナム国境の変遷をまとめてみると、この国境地域が現在中国とベトナムという二つの国家の境界に位置しているが、前植民地期から独立後の国民国家にいたるまで、常に二つの政体の狭間であり続けた。

中越両国が正式な国民国家として形成される以前、中国・ベトナム国境地域は近代国家の「中心」に対する「周縁」ではなく、国境が明確に画定されなかった。中国王朝とその周辺諸国・諸地域との関係は、基本的に「華夷秩序」や「徳治」の理念などによって構想されていたため、ぼんやりとした両国の「中間地帯」は、名目な「辺疆」の存在にすぎなかった。国家権力行使が遙かに離れた境域に行き届くことができなかった。また、ベトナムは中華帝国の領土の一部としてその支配下にあり、自立達成後においても中国の歴代王朝と藩属関係を結び、定期的に朝貢してきた。国境に対する認識は朝貢システムの下で相対化、弱体化されたと言えよう。

伝統的な境域から近代的な国境への移行を果たしたのはフランス植民地支配の19世紀初期であった。とはいえ、国境の画定がただちに直接人々の生活に大きな影響を及ぼしたわけではない。植民地時代には、国別意識はさほど強くなく、商業活動はもとより、文化活動や婚姻関係も国境を越えて行なわれるのが、普通のこととみなされていた。ベトナムはフランス植民地支配下にあり、まだ近代国民国家を形成しておらず、国家という意識はまだなく、あるいは弱く、国家に束縛されない民族の世界の強固な役割が機能している時期である。歴史的に共存してきた地域が維持されている。

国境の存在が人々の生活に直接的な影響を与えるのは、両者の独立を経た二十世紀中葉以降である。戦後の脱植民地化、国家形成は、国家と人々のせめぎ合いは、新たな段階を迎えた。特に、民族独立戦争

が国民国家の成立を促進させ、ナショナリズムを喚起し、国民統合を強化することになる。

さらに、1970年代には、国境地帯の人々の生活に決定的な影響を及ぼす出来事が相次いで生じた。中越紛争をはじめとする一連の出来事は、国境閉鎖（1979年から1992年まで）につながり、国境の壁は高くなった。国家の介入は、生活実践の面において地元住民に直接的に影響を与えただけではなく、アイデンティティの形成においても大きなかげを落とした。伝統的生存空間は国家の政治権力の枠組みに押し入られるようになる。国境を越える違いは人々に認識されるようになった。国境管理部隊の駐屯、越境制限の強化のほか、90年代以降中越両国は国境地帯経済開発に力を入れた。特に国境貿易において、国境地帯住民を対象とした一連の優遇政策が出された。一定程度、国家への帰属意識の強化にも繋がった。

しかしながら、いくら国境をめぐる政治・経済的制度が変わっても、国境住民たちは基本的に個人の意思で越境交易や移動を行なう。自分を領域内に取り込んだ国家、その国家に隣接する国家など、重層した影響下に置かれてきた国と国の狭間に暮らす人々が、国家権力の政治的・経済的・文化的影響を受けつつも、自らの生活世界を能動的に変化させる。政策決定やグローバルな経済原理に抵抗するローカルな生存戦略である。

国境社会にとって、国境をめぐる政治・経済制度の変容は、中越関係の一連の変動の波及である。その変動の誘引により、地域や社会の枠組みが変わっていくことがあるが、国境が人々の「生活の場」であることに変わりはない。国境に生業を求める人々の活動は、国家による一貫した強力な政策介入に対して、それなりの対応を行い、対抗するばかりではなく、ときどきその力とせめぎ合いながら利用して能動的な働きかけや新しい形の関与を行い、自主的な変化を達成しようとする様子を明らかにした。

また、個人の越境意思決定の背後に何があり、何を求めて越境するかはそれぞれ違うが、多くの場合は生活改善が主要な動機である。ほとんどの人は、自国にないものやより良い商品を手に入るという生活資源へのアクセスのみを意味するものではなく、雇用機会、ビジネス・チャンスにおいて経済利益がある場所として、越境活動を行なっているのである。たとえば、「運び屋」を介したインフォーマルな国境貿易の形成については、国境をめぐる政治経済的な変容などに関連付けた分析により、国家ないし市場経済システムの権力作用を認めることができる。

重要なのは、人々はそのような権力作用の単なる受身の存在ではなく、国家レベルで構築されている政策を積極的に利用していることである。国境内外の政治経済状況が変わっても、日常生活における国境との共存を余儀なくされている。制度的資源の利用を可能とすることで地元住民が生活を維持していることを明らかにした。それは、自分の置かれている環境を認識した上で、辺民優遇政策の読み替えを通じて政策・制度を資源化し、国境地帯住民という身分を利用し、国境貿易への参与によって収入を獲得する生活術でもある。また、国境を前提として生活を成り立たせる一方、国境社会が国家や国境という概念を能動的に取り込み、新たなネットワークを形成し、そして地域間関係を再編成させつつ、なおかつ国家の政治・経済的な措置に影響を与えつつある。

国境に関するこれまでの分析の大多数は、「中心」の国民国家をを起点として、これとの偏差において「周辺」として分析する、という手順をとってきた。その結果、「国境」対「辺境」、「規制」対「自由」といった二項対立からなかなか逃れられなかった。また、国境住民は、国家との関係においては、単に客体化されるだけの存在ではなく、国境を客体化する主体的存在であるという事実が忘れがちである。地域住民の行動は国民国家という単位から理解し難く、広域な社会空間の一部として理解すべきである。本論文は、両者が接触する緊張関係の中で、「中心」の権威を背景にして浸透していく一方で、それを受容・服従しつつも生活場面において異なる解釈とそれに基づく運用が蓄積されることに注目した。本研究では、国境を「生活空間」と「政治空間」との二重的性格をもつ空間と把握し、国境社会の人びとが、国家の介入など、新たな状況の中でいかに柔軟に対応してきたかを明らかにした。

本論文は、中国・ベトナム国境を題材に、こうした国家と社会の深層に迫ろうと試みた研究である。国境地帯住民を国境空間の主体とし、国境の歴史を描き、国境を視座の中心に据えて近代中越史・関係を捉え直す試みでもある。人為的に作り出される国境という政治空間を、変動と変革という側面から民

族誌として描くことができた。動態としての国境空間を、国家との関連、地域住民との関係で設定し、あたらな国境像として提出した。

もう一つは近代国家の不完全性を見出した。中国・ベトナム国境から見ると、草皮街のように、戦争の最中でも交流が続き、国家の保護におかれていない住民たちは、自分の知恵を生かし、自分たちの生活を守ろうとした。国境再開後、取締り体制の強化に関わらず、インフォーマル交易など国境を越えた生活を営む・維持する伝統的な交渉が毅然として残っている。正式な制度ではない、自然発生的いたるところにあった。ここまで拡大している。多くの場合、国境地域の住民は、国家の制度・法に触れながら国境を越えた社会・経済的つながりを形成している。国家の干渉に対してかなり高い度合いで能動的に働きかけ、あたらな関係を築こうとしている。

国家の制度・政策が自らの利益に危害し、自らの生活に干渉してくるものだとみなした場合、自分の都合のよいように解釈したり、無視したりする傾向が見られる。場合によって、国境を越えて形成された諸関係は、国家に対する以上に強い力を持つこともあるのではなかろうか。

それは、国家は国境地域を統治する能力に欠けたりすることにあるともいえる。手に負えない国境地域は、国家の定めた法律の効力が曖昧な空間でもある。国境が整備されていても、国家の影響力の届く範囲は国境いっぱいになってない。国家は、国家規模の経済の中に国境地域を統合できていないため、国境地域の住民はほかに選択肢を持っていないのである。

つまり、近代国家の発展の過程で、国家の権力は国境いっぱいまで手を届くことができなかった。従来の国境通説のような、前近代、近代、ポストモダンのようなきれいな発展段階ではない。むしろ、不完全な近代国家が存在する。近代は不完全な形で存在していなかった。従来の発展段階説の反論に違った視点を提供できたと思う。

参考文献

<日本語文献>

- アンダーソン, B. (1997) 『想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』(増補)、白石さや・白石隆訳、NTT 出版
- アーネスト・ゲルナー (2000) 『民族とナショナリズム』加藤節監訳、岩波書店
- アンソニー・ギデンス (1999) 『国民国家と暴力』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房
- 綾部真雄(1998)「国境と少数民族: タイ北部リス族における移住と国境認識」、『東南アジア研究』、35(4)、pp. 171-196
- 石川登 (2008)「境界の社会史—国家が所有を宣言するとき」京都大学学術出版会
- 今井昭夫 (2009)「旧北ベトナム・西北地方在住少数民族のベトナム戦争参加」『東京外国語大学論集第79号』
- 池田部 (2010)「中越国境経済圏でみる中越経済格差の縮図」石田正美編 (2010)『メコン地域国境経済をみる』アジア経済研究所
- 伊藤正子 (2003)『エスニシティ<創生>と国民国家ベトナム: 中越国境地域タイ族・ヌン族の近代』三元社
- 伊豫谷登士翁 (2002)『グローバリゼーションとは何か』平凡社新書
- 梅垣理郎 (1999)「国民国家の前後」、内山秀夫編『講座政治学 I 政治理論』、三嶺書房
- 岡本隆司(2009)「清末の対外体制と対外関係」飯島渉ほか編『中華世界と近代』(シリーズ 20 世紀中国史) 東京大学出版会
- ガブリエル・コルコ (2001)『ベトナム戦争全史—歴史的戦争の解剖』陸井三郎監訳 藤田和子、藤本博、古田元夫訳、社会思想社
- 川島真 (2010)「近現代中国における国境の記憶—本来の中国の領域をめぐる」『境界研究』No. 1 pp. 1-17
- 栗原浩英 (2000)「ベトナム戦争と中国・ソ連」『アジア研究』第 46 巻第 3・4 合併号、pp. 111-140

- 鹿沢武 (1978) 『中国・ベトナム関係 中越紛争の歴史と国際環境』 教育社
- 茂木敏夫 (2009) 「中国的世界像の変容と再編」 飯島涉ほか編 『中華世界と近代』 (シリーズ 20 世紀中国史) 東京大学出版会
- ジョルジュ・セデス (1980) 『インドシナ文明史』 辛島昇、内田晶子、桜井由躬雄訳、みすず書房
- 高村加珠恵 (2007) 「インフォーマルな越境が日常化する空間のメカニズム：タイ・マレーシア国境東部からの考察」、『アジア・アフリカ言語文化研究』、74、pp. 165-192
- 塚田誠之編 (2010) 『中国国境地域の移動と交流：近現代中国の南と北』、有志舎
- トンチャイ・ウィニッチャンクン著 (2003) 『地図がつくったタイ：国民国家誕生の歴史』、石井米雄訳、明石書店
- ナヤン・チャンダ (1999) 『ブラザー・エネミー』 友田、滝上広水訳、めこん
- 西本陽一 (2004) 「山の民から少数民族へ：タイ北部・ラフの山地民意とその変化」、『地学雑誌』、113 (2)、pp. 283-293
- マックス・ヴェーバー (1980) 『職業としての政治』 脇圭平訳、岩波文庫
- 益尾知佐子 (2007) 「鄧小平の対外開放構想と国際関係 —1978 年、中越戦争への決断」 『アジア研究』 53(4) pp. 1-19
- 松岡完 (1999) 『1961 ケネディの戦争：冷戦・ベトナム・東南アジア』 朝日新聞社
- 松村嘉久 (2000) 『中国・民族の政治地理』 晃洋書房
- 毛里和子 (1998) 『周縁からの中国——民族問題と国家』 東京大学出版社
- 吉田元夫 (1979) 『ベトナムから見た中国』 日中出版
- 古田元夫 (1997) 『ベトナムの世界史：中華世界から東南アジア世界へ』、東京大学出版会
- ヤープ・ファン・ヒネケン (1985) 『インドシナ現代史 下』 連合出版

<中国語文献>

- 『清実録』、『雲南通志』、『大南実録』、『臨安府志』
- 雲南省緑春県志編纂委員会 (1992) 『緑春県志』 雲南人民出版社
- 雲南省金平苗族瑶族自治県地方志編纂委員会 (1994) 『金平苗族瑶族自治県志』 三聯書店
- 雲南省河口瑶族自治県地方志編纂委員会編 (1994) 『河口県志』 三聯書店
- 雲南省馬関県地方志編纂委員会編 (1996) 『馬関県志』 三聯書店
- 中国社会科学院歴史研究所編 (1982) 『古代中越関係史資料選編』 中国社会科学出版社
- 黄国安・蕭德浩・楊立冰編 (1988) 『近代中越関係史資料選編』 广西人民出版社
- 中央研究院近代史研究所編 (1962) 『中法越南交渉档』 中央研究院近代史研究所
- 蕭德浩、黄铮 (1993) 『中越边界歴史資料選編』 社会科学文献出版社
- 鄧礼峰 (2000) 「援越抗美述略」 『当代中国史研究』 第 9 卷第 1 期 pp. 84-93
- 杜進森 (2000) 「90 年代以来的越中貿易及其展望」 『東南亜縦横学術増刊』 東南亜縦横雑誌社
- 範宏貴等編 (2006) 『中越边境貿易研究』 民族出版社
- 黄永祥 (1994) 「金平『草皮街』 走向大市場」 『雲南民族学院学報 (哲学社会科学版)』 第 4 期 pp. 17-18
- 李桂華 (1986) 「越北山区国境各省の経済問題」 第 4 期
- 李桂華、斉鵬飛 (2008) 「中越边界問題研究述略」 『南洋問題研究』 第 4 期 (総第 136 期) pp. 90-100
- 梁雨祥編 (1997) 『中越経貿関係與憑祥發展戰略』 广西人民出版社
- 劉欽麟 (1985) 「1984 年以来的广西边境局勢簡析」 『東南亜縦横』 第 2 期 pp. 26-29
- 劉欽麟 (1988) 「清政府对中越边界广西段的管理」 『中国边疆史地研究報告』 1988 年 12 月
- 龍永行 (1992) 「中越边界桂越段会談及勘定」 『中国边疆史地研究報告』 第 1-2 期合刊
- 木芹 (1991) 「清代中越边界雲南段述評」 『中国边疆史地研究報告』 第 1-2 期合刊
- 倪創輝 (2009) 『十年中越戦争 (上、下)』 香港：天行健出版社
- 農立夫 (2000) 「中越边境貿易回顧及發展建議」 『東南亜縦横』 2000 年 S1、

- 潘金娥 (2011) 『越南政治經濟與中越關係前沿』 社会科学文献出版社
- 孫宏年 (2001) 「清代中越陸路邊界桂越段交涉述論」 『中國邊疆史地研究』 第 2 期
- 孫宏年 (2006) 『清代中越宗藩關係研究』 黑龍江教育出版社
- 田阡、楊紅巧 (2009) 「跨境民族的生存空間與生存戰略」 『廣西民族研究』 第 4 期 pp. 63—69
- 韋福安 (2008) 「中法戰爭與中越邊境地區的近代化契機——以近代越、桂越邊境貿易和交通變遷比較為例」 『廣西民族研究』 第 2 期 pp. 167-174
- 王文成 (2008) 「約開商與清末雲南對外經貿關係的變遷」 『雲南社會科學』 第 3 期 pp. 124-128
- 王士錄 (2004) 「雲南人民對越南抗法戰爭的支援」 『東南亞』 第 1 期 pp. 54-58
- 楊清震 (2005) 『中國邊境貿易概論』 中國商務出版社
- 尤中 (1987) 『中國西南邊疆變遷史』 雲南教育出版社
- 鄭宇·楊紅巧 (2009) 「跨國婚姻關係與邊疆民族社會變遷」 『學術探索』 第 5 期 pp. 57-61
- 朱振明 (2000) 「雲南與鄰國的邊境貿易及發展」 『雲南社會科學』 第 6 期 pp. 53-59

〈英語文獻〉

- Anderson James, O' Dowd Liam, 1999, Borders, Border Regions and Territoriality: Contradictory Meanings, Changing Significance, *Regional Studies*, Vol.33 (7), pp. 593-604
- Brenner Neil, 1999, Beyond State-centrism: Space Territoriality and Geographical Scale in Globalization Studies, *Theory and Society*, Vol.28 No.1 pp. 89-78
- Chang Pao-min, 1986, *The Sino-Vietnamese Territorial Dispute*, New York: Praeger
- Chen King C., 1987, *China's war with Vietnam, 1979: Issues, Decisions, and Implications*, Stanford University Hoover press publication
- Donnan Hastings, Wilson Thomas M., 1998, *Border Identities: Nation and State at International Frontiers*, Cambridge University Press
- Donnan Hastings, Wilson Thomas M., 1999, *Borders: Frontiers of Identity, Nation and State*, Oxford and New York: Berg
- Gainsborough Martin (ed), 2008, *On the Border of State Power: Frontiers in the Greater Mekong Sub-region*, Routledge
- Goscha Christopher E., 2000, The Borders of Vietnam's Early War-time Trade with Southern China: A Contemporary Perspective, *Asian Survey*, Vol.40 No.6, pp. 987-1018,
- Grant Evans, Christopher Hutton, Khun Eng Kuahm, 2000, *Where China Meets Southeast Asia: Social & Cultural Change in the Border regions*, Palgrave Macmillan Published
- Hood Steven J., 1992, *Dragons entangled: Indochina and the China-Vietnam War*, Armonk, New York
- Luong Hy V., 1992, *Revolution in The Village: Tradition and Transformation in North Vietnam*, Honolulu: University of Hawaii Press
- Maurice Abadie, 2001, *Minorities of the Sino-Vietnamese Borderland, with Special Reference to Thai Tribes*, Bangkok: White Lotus
- Niles Hansen, 1981, *The Border economy: Regional Development in the Southwest*, Austin: University of Texas Press
- Poisson Emmanuel, 2009, Unhealthy Air of the Mountains: Kinh and Ethnic Minority Rule on the Sino-Vietnamese Frontier from the Fifteenth to the Twentieth Century, in Gainsborough Martin (ed), *On The Borders Of State Power: Frontiers In The Greater Mekong Sub-region*, pp. 12-24, London: Routledge
- Rajah Ananda, 1990, Ethnicity Nationalism and the Nation-State: The Karen In Burma And Thailand, Gehan Wijeyewardene (ed), *Ethnic Groups Across National Boundaries in Mainland Southeast Asia*, pp. 102-133, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies

- Roper Christopher T., 2000, Sino-Vietnamese Relations and the Economy of Vietnam's Border Region, *Asian Survey*, Vol.40 No.6, pp. 1019-1041
- Scott James C., 2009, *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, Yale University
- Sturgeon Janet C., 2005, *Border Landscapes: The Politics of Akha Land Use in China and Thailand*, University of Washington Press
- Tambian S. J., 1976, *World Conqueror and World Renouncer*, New York: Cambridge University Press
- Thiesmeyer Lynn, 2010, *Informal and Illegal Movement in the GMS: Costs and Benefits of Informal Networks for Goods and People*, IRASEC
- Turner Sarah, 2010, Borderlands and Border Narratives: A Longitudinal Study of Challenges and Opportunities for Local Traders Shaped by the Sino-Vietnamese Border, *Journal of Global History*, No. 5, pp.265-287
- Van Schendel Willem, 2005a, One Space of Engagement: How Borderlands, Illegal Flows, and Territorial State Interlock, Van Schendel Willem, Abraham Itty (ed), *Illicit Flows and Criminal Things: States, Borders, and the Other Side of Globalization*, Bloomington: Indiana University Press
- Van Schendel Willem, 2005b, *The Bengal Borderland: Beyond State and Nation in South Asia*, London: Anthem Press
- Walker A, 1999, *The Legend of the Golden Boat : Regulation Trade and Traders in the Borderlands of Laos, Thailand, China, and Burma*, Richmond: Curzon Press,
- Walker A, 2008, Are the Mekong frontiers sites of exception, in Martin Gainsborough ed., *On the Borders of State Power: Frontiers in the Greater Mekong Sub-Region*, pp.101-111, Routledge
- Womack Brantly, 1994, Sino-Vietnamese Border Trade: The Edge of Normalization, *Asian survey*, Vol.34 No.6, pp. 495-512
- Womack Brantly, Gu Xiaosong, 2000, Border Cooperation Between China and Vietnam in the 1990s, *Asian Survey*, Vol.40 No.6, pp. 1042-1058
- Wolters, O.W., 1982, *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*, Singapore Institute of Southeast Asian Studies
- Zartma I. William(ed), 2010, *Understanding Life in the Borderlands: Boundaries in Depth and in Motion*, University of Georgia Press